

## 私にとっての曾田先生と広島

笹川 裕史

初めて曾田先生にお会いしたのは、先生が広島大学総合科学部で助手をされていたときであった。私が入学した当初は、まだ故今堀誠二先生が総合科学部で一般教養の授業を担当されており、それは大勢の受講生でごった返す、広大の名物講義であった。ある日、遅れて教室に駆けつけると、その教壇には若い別の教員が立っていて、学務関連の説明をしていた。私の記憶に誤りがなければ、それが曾田先生であった。

その後、学部の3年になった頃、総合科学部の知り合いの院生に誘われて、曾田先生が個人的に主催する小さな読書会に参加させていただいた。メンバーは4~5人程度であり、シェノーやマクドナルドなどの英文の研究書を輪番で精読した。この読書会を通じて、英語圏の中国研究の魅力に初めて接したというだけではない。私にとっては、中国近代史研究に本格的にのめり込んでいくきっかけとなった。

その頃の曾田先生は、ベタベタした関係を避けて適度な距離をとりながら、私たち学生とつきあっていたように思う。それでも、飲み会の場などでは、青臭く不器用な問いかけにも、そこに見るべきものが僅かでもあれば、簡単に受け流したりせず、よりひろがりのある議論へと私たちを引きずり込んでくださった。余計なことには口を挟まないが、話を始めれば、筋の通った正論を吐く人、それでいて人の心の機微がよく見えている人、というのが、当時の私の印象であった。こうした機会を通じて、研究者としての“矜持とマナー”といったものを、知らず知らずのうちに学ばせていただいた。当時、先生がとくに嫌われていたのは、情緒的な大言壮語の類や、学者ぶった無神経な尊大さであったように記憶している。

このような曾田先生がまとっていた空気にも惹かれ、私は研究生生活の節目ごとに先生に相談事を持ち込み、その都度多大なお世話になってきた。それは、卒論・修論の執筆に向けての助言から始まって、後年における博士の学位審査にまでおよぶ。なんとも、迷惑のかけ通しで、感謝の言葉すら見つからない。

とりわけ、院生時代の私に初めての就職話が舞い込んだ折には、先生のご自宅にまで押しかけてご相談に乗っていただいた。いま振り返れば、最初から私の答えは決まっていたように思う。それでも、誰か信頼できる人に「おまえに選択の余地などない」と引導を渡してほしかったのかもしれない。曾田先生は、情に流されず、些かもぶれることなく、それがきちんとできる人であった。

それから数年して、先生はひょっこり「史料を見たいから」と、和歌山県内の片田舎にある私の赴任先まで、遠路はるばる様子を見に来られたことがあった。「なぜ、わざわざこんな不便な所まで？」といぶかりながらも、女房も交えて一緒に楽しく大酒を飲んだ。私にとっては、先生のもう一つの側面を垣間見た、かけがえのない思い出の一齣である。

ところで、故横山英先生が退職され、その後任として広大文学部に戻られて以降は、曾田先生と

の会話のなかで、広島中国近代史研究はどうあるべきか、その独自色をどう出すか、といった議論が増えた。いわば広島で「番を張られていた」横山先生の後継者として、曾田先生が背負い続けた重責は並大抵ではなかったと思う。

もちろん、あからさまな無視や無理解にさらされ、孤塁を守るように、学界の権威や主流どころと対峙し続けた横山先生の頃とは、およそ時代が違う。横山門下からも、曾田先生ご自身をはじめ優秀な研究者が輩出して各地に就職し、中央の学界でも活躍する事例は珍しくもなくなった。それでも、広島の学問的独自性にこだわるのは、たんなるローカルな母校愛や内向きの閉じた仲間意識からではない。

幸運にも首都圏の一角に職を得て十数年がたち、改めて思うのであるが、日本国内に個性の異なる複数の自律的な研究拠点が分立し、適度な距離を置いて相互に忌憚なく批判し合える環境がぜひとも必要である。たとえば、声の大きい一つの研究潮流が、さしたる批判や異論に出遭うことなく、大勢の物言わぬ研究者を巻き込んで全体を席卷するようになれば、当該分野全般の衰弱にもつながりかねない。たとえそれがいかに優れていたとしても、多様性の喪失が減びの道へと通じているのは、何も生物界だけの法則ではない。

その意味で、ときには流れに抗して立ち止まることができる自由な拠点の一つとして、広島中国近代史研究が存続してほしいと思う。それが、「広島で学ぶことの意味を考えなさい」と諭された恩師である横山先生の願いでもあったと、私は理解している。とはいえ、グローバル化の波があらゆる分野に押し寄せる昨今、外部に自らを開きつつ、なおかつ個性を失わないことは、言葉で言うほど生やさしいことではない。そのなかであって、曾田先生の2年半前に上梓された著書（『立憲国家中国への始動』）は、末尾の「あとがき」における警鐘に至るまで、「広島の二代目ボス」の最後を飾るにふさわしい、見事なお仕事であったと、私は確信する。

曾田先生、長い間、ご苦労様でした。広島という荷物を降ろした後も、研究者としてお付き合いいただければ、光栄です。



2007年北京大学にて（左3人目：著者）

（ささかわ ゆうじ 博士課程後期1987年10月中退）